



TITLE:

計画1-1 黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態(V 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

加藤, 満

CITATION:

加藤, 満. 計画1-1 黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態(V 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1998, 28: 77-77

ISSUE DATE:

1998-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165154>

RIGHT:

2. 研究成果

(1) 計画研究

計画 1-1

黒部川流域に生息するニホンザル
地域個体群の動態
加藤 満（愛知県立旭野高等学校）

8 年度に続いて、富山県宇奈月町の黒部川流域に分布するニホンザル野生群を対象にして、テレメーター装着のための捕獲と生息調査を行った。

すでにテレメーターを装着している群れについては、97年12月にON群のオスの成体、98年1月にMO群のオスの成体を捕獲してテレメーターを装着した。更に、98年1月にON群、MO群とホームレンジが重複していて、テレメーターが着いていなかった群れのオスの成体を捕獲して、テレメーターを装着した。

97年4月から98年3月まで黒部川流域8.7Kmを対象にしてテレメトリー法により、毎月3回モニタリング調査を行った。12ヶ月間追跡することができた群れは、ON群、MO群、MT群の3群で、1年間のホームレンジの長径と面積はON群が8.19Km、13.27Km²、MO群が3.33Km、3.97Km²、MT群が2.88Km、4.53Km²であった。ON群のホームレンジは他の2群に比べて約3倍の面積をもつが、これはON群が5月中旬から7月下旬にかけて融雪後の新緑を追って標高差1000m以上の大きな垂直移動を行うことと、人里へ接近して農作物に依存するようになったという群れの行動特性によっている。一方、MO群、MT群は同程度の大きさのホームレンジをもち、いずれも標高800m以下の、黒部川兩岸の落葉樹林を利用しており、ON群のような大きな季節的変動はみられない。群れのホームレンジサイズは、その群れがもつ土地利用の行動特性によって大きな変異を示している。

計画 1-2

和歌山県、奈良県の野生ニホンザル
地域個体群の生息実態調査
五百部裕、小田亮、松本晶子、日並正成（京都大・理・人類）、田代靖子（京都大・霊長研）

本研究は、一昨年度、昨年度の共同利用研究の継続であり、和歌山県と奈良県において、野生ニホンザルの生息実態、猿害の発生状況、ならびに人間の生産活動を把握し、猿害発生メカニズムを探ることを目的とした。本年度は、平成5年度以来継続して調査を行ってきた和歌山県中津村で引き続き現地調査を行うとともに、奈良県北東部でのニホンザルの生息と猿害の実態を把握することを目的として、奈良県室生村、曽爾村でも現地調査を行った。中津村での現地調査は、平成9年5月、9月、平成10年2月の3回、室生村、曽爾村での現地調査は、平成9年9月に1回行った。これらの現地調査では、地域住民への聞き込みを行うとともに、ニホンザルの直接目視も試みた。また、9月の現地調査の際に、地域住民にアンケート用紙を配布するという手法で、アンケート調査も行った。

継続調査を行っている中津村では、サルを見たという情報が、聞き込み、アンケートとも、今年度は昨年度に比べ少なく、猿害も昨年度より少なかった。これは、山の中の果実が多かったためと考えられた。一方、今回初めて調査を行った室生村、曽爾村では、猿害が十数年前より発生しており、最近増加傾向にあること、これにともない野生ニホンザルの目撃情報も多いことが明らかになった。今後、これらの資料を分析し、ニホンザルの生息実態を把握するとともに、猿害発生と人間の生業活動との関係について考察していく予定である。